

「とにかく多数派になろう」

98年1月、日欧規格統一で合意

インターネットへの接続をいち早く実現するなど、「ゲート大国」を自負する日本はつい数年前まで、世界の携帯電話市場のなかで異質な存在だった。NTTドコモが開発した「日本方式」の規格が海外展開に乗り遅れ、「孤島」になっていた。そこからどう抜け出すか。次世代の規格づくりが本格化した90年代後半、ドコモがとった戦略が欧州勢との連携だった。

第3世代携帯

「これは、ひき詰め談判しかないかもしれない。NTTドコモ社長の犬塚公一は、そう思い定めて欧州を飛び回った。『こちらは実証実験に成功している。手を組もう』」

各国の電話会社、通信機器メーカーを訪れては、第3世代と呼ばれる次世代携帯電話の規格統一を求め、トップ交渉を繰り返す。目標に定めたのは、目前に迫った98年1月の欧州の規格統一会議。そこでドコモの「W



証言でたどる同時代史

携帯電話の国際標準規格の「乱立を防ぐため、国際標準化機関、国際電気通信連合(ITU)が国際標準を定めている。第1世代の「アナログ携帯」に続いて、90年代前半に登場した第2世代の「デジタル携帯」は、欧州(GSM)方式、日本(PD



NTTドコモ常務 木下耕太氏

「mov-a(ムーバ)」の第2世代と「FOMA」の第3世代の両方の開発にたずさわりましたが、しんどかったのは第3世代です。NTTで開発した第2世代の日本方式では、自分たちで1から全部決められた。欧州勢との共同開発となった第3世代では、相手の意向で採り入れた部分は、どうこう仕組みなのかを理解するのから始めなければならなかった。多くの意見を反映してきて、選択が増えすぎた面もあります。

第2世代の日本方式でも、電波の利用効率やつながりやすさは欧州方式に見劣りしなかった。ただ、環境を越えてつながる

証言 欧州の意向、まず理解

木下氏は、日本ではその感覚をもっていない。欧州では当たり前だったのに、日本ではその感覚をもっていない。世界で通用するには多数派にならなければならない。これが第2世代での教訓です。言葉でいえば体系が整ったエスプレンドをめざすのではなく、英語などによって世界中で使われるようにする。そのほうが結局は得るところが大きいと考えました。規格の標準化がひと思いついたあと、システム開発も大変でした。第2世代より複雑さが1けた違っていました。最初からテレビ電話など様々な高機能盛り込んだことが作業を難しくし、思い描いた形になるまで2年くらいかかりました。

いまでは日本国内の端末の大半を第3世代に切り替えることができて、それも導入当初の苦勞があれは「それと気づいてます」。

両国の通信メーカー、システムベンダーは、日本方式の採用に頑として応じない。欧州の規格会議では、域内の通信メーカーや電話会社が、その規模などに応じて投票権をもつ。「独仏が反対のままで、必要な票数をとれない。では通信大手のドイツテレコム、フランステレコムの説得に切り

「国境の壁」教訓に

ドコモが欧州との規格統一にこだわった背景には、第2世代携帯での苦い教訓がある。98年8月に国内でのサービスを開始した日本(PDC)方式は、ドコモが分離独立する前のNTT時代に開発された、ITUに国際標準として承認された。しかし、採用する国は現れなかった。

90年代半ば、大星はアジア各国へ売り込みが回り、すでに欧州(GSM)方式が普及していることを知る。「技術的にはこちらが上」と力説しても手遅れだった。

不人気の理由のひとつは、日本方式が開国後の体勢だったこと。地続きの国境を越えて隣国に行っても簡単に接続できる、その仕組みがなかった。

一方の欧州方式は、それまで域内の主要国がほぼこの規格

続く主導権争い

ドコモと欧州勢が手を組んだ第3世代携帯の標準化は、その後、もうひとつの有力規格、CDMA2000方式を提案する北米アルルへの主導権争いに入っていた。

北米勢を束ねる米アルコムは、双方のグループが利用する無線方式「CDMA」を実用化

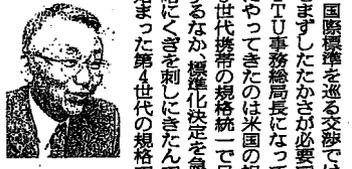
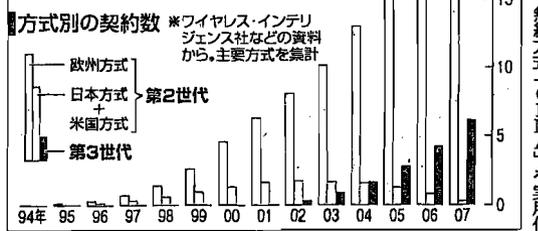
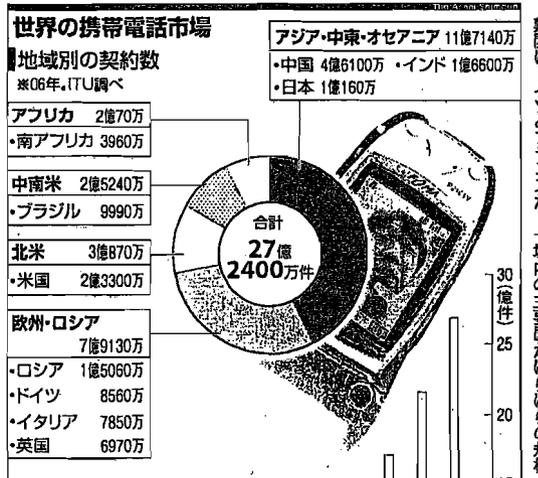
した実績をもち、その基本特許を押さえていた。グループの規格統一の話し合いは暗礁に乗り上げ、アルコムと欧州勢のイリクソンとの間で特許紛争が持ち上がったこともあった。

ITUは結局、規格の一本化を求めた。00年5月、複数の規格を認める形で標準化作業を終える。

世界の携帯電話市場はいま、第2世代と第3世代がともに拡大する状況が続いている。

中国やインド、ブラジルなど新興国の携帯需要が急拡大し、その大半を占めるのは第2世代の欧州方式だ。一方、日本では第3世代への切り替えが進む。「孤立化」の危機こそ乗り越えたが、欧米の第3世代移行が予想より遅れ、日本メーカーの海外展開は思うにまかせない。

ITUは今年、第4世代の標準化作業を本格化させる。光ファイバーなみの高速通信が売り物だ。規格を一本化できるのか、複数の規格が並び立つのか、2、3年が正念場となる。(敬称略、肩書は当時)



前ITU事務総局長 内海善雄氏

国際標準の交渉 したたかさ必要

国際標準を巡る交渉では、なによりもまずしたたかさが必要だ。99年にITU事務総局長に就任してすぐ、面会にやってくれたのは米国の担当大使。第3世代携帯の規格統一で日欧勢が先行するなか、標準化決定を急がないよう暗に働きを刺してきた。検討が始めた第4世代の規格では、今度は

欧州のメーカーが時期尚早だと言ってきたこともある。そんな駆け引きをしながら規格はまとまっていく。日本では「日本発の技術を国際標準にしよう」という声も聞きますが、それを口にしたとたん、逆効果になる。80年代後半のアナログ方式のハイジションレディでも現在の地上デジタル放送でも、自らの方式にこだわりすぎて標準化できず取り残された。むしろライバルの手を組んで共同開発し、自分の技術を手に入れた方がいいことが必要です。第3世代携帯の場合、欧州と手を組

このシリーズは毎週土曜日に掲載します。